

舒明天皇と万葉の時代

聖徳太子、山背大冠 やましろのおおえ 江代に渡る上宮 しょうぐう ) 朝の王位継承者であられた太子一族の上宮王家には一瞥 いちべ 王家の歴史をまとめた連載の最終回としては奇妙な書き出しだが、宝 皇后の第一子、中大兄皇子、天智天皇)の誕生が舒明じょめい)即 位3年前の626年だという点を筆者が見落としたため、前回は読者に 勘違いをさせたことを先ずお詫びしなければならない。蘇我蝦夷 え みし)によって宝皇后が高向王と離別させられ、田村皇子様に再嫁さ れたのは、少なくとも馬子が死亡する前の625年以前の事だった。そ れにつけても蝦夷の用意周到ぶりには舌を捲く。

舒明天皇の即位が629年、天皇には伯父の娘にあたる宝皇女が皇 后となられたのは不思議にも1年後の630年。さて田村皇子 舒明天 皇 に再嫁のとき、記録によれば宝皇女様は先夫と離別ではなく死別 とある。結婚したばかりの夫婦が死別とはこれいかに。仮に田村皇子 様とのご縁談があったにせよ、一時皇太子であられた皇子の父君は 未だ行方知れず、身寄りの無い田村様よりも独身の宝皇女様が高向 王様を伴侶に選ばれたのは自然のこと。

ところが蘇我氏の中に馬子に反抗して太子を嫌う蝦夷という異端

法起寺、法輪寺からの古道から法隆寺を遠望。山背大兄が命懸けで消失か ら守った太子建立の法隆寺は残念ながら大化の改新の後に失火で全焼した。 現在の法隆寺は持統天皇並びに藤原不比等の号令で再建されたもの。

者がいて、太子ご一族へのあてつけか、秘かに孤児の田村皇子様 を拾い上げ、祖父の代より一族挙げて支えてきた欽明(きんめい)王 つ)もくれず、わざわざ非蘇我系の田村皇子を御位につけたのだ。

その日のために蝦夷は夫と離別して頂いてまで非蘇我系皇女を 田村様に嫁がせていたことになる。もし読者が宝皇女先夫の高向王 なら、こんな理不尽を承服できようか。皇族ならずとも男性の誇りがあ るならば、このような屈辱に耐えきれず、自ら命を絶つやもしれぬ。宝 皇女様再嫁の前後には、こんな悲劇なドラマがあったかもしれない。だ がそれを明らかにする記録は残っていない。

さて万葉集の研究家であって晩年には教団 生長の家 の理事長 を勤められた山口悌治先生は、著書「万葉の世界と精神」の中で、万 葉集には若干古い時代の歌も載せられてはいるが、特色ある万葉和 歌が多数詠まれるのは舒明天皇の時代からだと述べられる。天皇が 大陸文化の流入に消極的だったとは思わないが、国風文化が華開 いた時代ではある。国民が詩歌に親しむ文化の浸透があるほど平和 な時代であったのは明らかだ。

だが全く争乱が無かった訳ではない。636年、舒明天皇は百官の司 (つかさ)たちの礼儀作法が弛 ゆる)み出したことを、群臣の長である 大臣(おおおみ)の責任だと蝦夷を非難された。だが蝦夷には天皇 ご立腹の理由が呑み込めない。群臣たちが上下の隔てなく和気あ いあいと仕事に励めるのを謳歌したいくらいだった。日が昇らぬ早朝 から百官を集めて仕事始めとなず「朝参」の儀にも、遅刻者が続出 する始末。そのたびに天皇からお叱りを受けたことで嫌気がさしたか 蝦夷は翌年から昇殿しなくなり、自ら「大臣」職を有名無実にした。天 皇はそんな蝦夷を懲らしめるため、上野毛形名(かみつけののかた な を将軍にして蘇我の館を攻めさせられた。蝦夷はさんざん上野毛 軍に痛めつけられ、分家の境部(さかいべ)が滅びたことで大きく傾 いた蘇我家を更に弱体化させるに至った。

## 皇極女帝の即位と新世代の台頭

舒明 じょめい 天皇と皇后との間には中大兄皇子と間人 はしひと) (太子生母と同名だが、太子生母は穴穂部間人と呼んで区別する 皇 女がお生まれであった。また蝦夷の妹、法提郎女 ほてのいらつめ 夹 人の版はらからは、それよりも早く古人大兄皇子がお生まれだった。 さて舒明天皇が即位されて13年、天皇は俄かに病に倒れられた。中 大兄皇子には秘かに伊勢の豪族に育てられた大海女(おおあま)皇 子という弟君がおられることを皇后様が明らかにされたのは、このよう な微妙な時期であった。

上宮王家の山背大兄 オオエは皇太子あるいは皇太子候補の意味)



が所有される様な領地もなく、義兄の古人大兄のように蘇我の威を借りてのさばることもできず、蘇我の分家、蘇我倉山田がやっと支援し始めた中大兄皇子などよりも、東国の豪族たちがこぞって支援者となっていた大海女皇子の方が、この段階では余程実力者だったのである。

美濃、伊勢、鈴鹿などの東国をご自分の味方に繋ぎおくため、中大 兄皇子様が弟の大海女皇子に心を砕かれた事情はよく分かる。だ がそれにしても中大兄皇子様は、この後に長女、次女後の持統女帝) お二人のお嬢様方を同時に弟君に嫁がせられ、改新のクーデターか ら23年後の即位のときも、ご嫡男がおられるのに大海女皇子を皇位 継承者を示す「皇太弟」にされているのだ。実の弟を味方にするため に何故ここまで気遣われ、ここまで自己犠牲を払われたのであろうか、 不思議である。

古代史研究では異端者の大和岩雄氏の意見を紹介しよう。その著「天智・天武天皇の謎の中で、大海女皇子は宝皇女再嫁のとき、既に御腹におられた高向王の御子かとの説である。なるほど、天武天皇(大海女皇子 )は確かにお生まれの年代が記録から抹消されている。天智天皇(中大兄皇子)と天武天皇(大海女皇子)が種(父親)違いの兄弟だとするなら、そして中大兄皇子を立てるために、周囲が兄」の大海女を無理に「弟」にしたのなら、中大兄の異常なほどの大海女への気遣いにも合点が行こう。だが「天武天皇は天智天皇の弟ではなく兄である」とする大和岩雄氏の説はやはり無理があって、そのままには採用しにくい。ただし大海女皇子は自らの出生の経緯を伏せなければならぬほど、誕生に公言できぬ秘密がある方なのは間違いないだろう。そのことが「立后」が「即位」に12ヶ月も遅れた事情と関係があるのかも知れないと筆者は秘かに考えている。

641年10月、舒明天皇崩御。翌642年1月、宝皇后は、山背大兄や古人大兄の即位を妨害する形で自ら即位なされた。第35代、皇極天皇である。皇極女帝は太子にも実現しえなかった大陸の律令制度に再び挑戦しようとなされた。そこで女帝は太子のような改革推進者となる適任者を探される。律令制度の研究者といえば第一人者は太子ご嫡男、山背大兄、やましろのおおえ、皇子であろう。だが上宮王家が再び政治の表舞台に立たれるのかとの期待はあっけなく外れる。女帝が選ばれたのは蝦夷、えみし、嫡男の入鹿(いるか)であったからだ。

## 天皇弟君、軽皇子様の野望

女帝が老成して博学なる山背大兄ではなく、知識とキャリアでは全く劣る若造の入鹿を行政改革の責任者にされたのは、父の蝦夷を恐れてのことではない。確かに律令の研究者としては山背大兄の右に出る者はない。しかし改革のスムーズなる実現を望むのなら、説得力と人望が必要である。山背大兄皇子ではそれが望めないと女帝は考えられたのである。

確かに山背大兄皇子は有徳かつ頭脳明晰(めいせき)博学多彩の人物である。しかし残念ながら理屈が過ぎて、人情の機微を心得られぬ。品行方正は良いとしても、清濁合わせて呑むことができない。それに比べ若いがよく気が付いて年長者からも可愛がられる入鹿の方にこそ、女帝は可能性があると考えられた。海外から来ていた僧侶や学者たち総てをスタッフにつけやるほど、女帝は若き入鹿に魅入られるように力を貸された。

さて滅んだ物部氏とともに神社施設の神官の地位を独占してきた中氏 なかとみ 氏だったが、太子の伯父、穴穂部に氏の長の勝海(かつみ)を殺害されてよりは見る影も無く衰退し、その傍流の末裔、鎌足(かまたり)は女帝の弟君、軽(かる)の皇子様に拾われ、ご主人に大唐の兵法を教授することで、やっと食にありつく暮しをしていた。

そんなある日、軽皇子様は中臣鎌足を呼んで皇位奪取への秘かな野望を漏らされた。

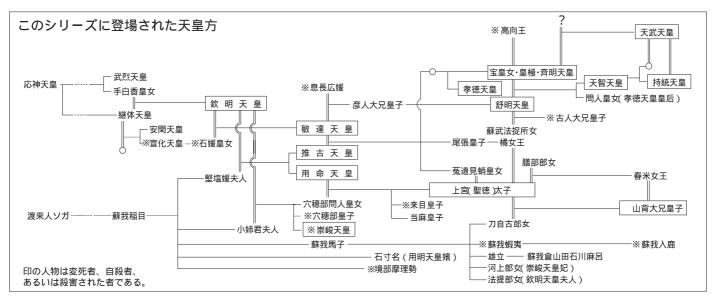
「鎌足の知恵さえあれば見果てぬ夢ではなかろう。今大兄皇子様が三方もおられ、皇位を巡って三つ巴の争いが始まろうとする。さて蘇我に目をやれば、入鹿は蝦夷の意思も確かめず、蘇我系の古人大兄を露骨に推そうとする。しかし中大兄と姻戚を結びたい分家の蘇我倉山田も黙ってはいない。蘇我も三つ巴の主導権争いよ。汝、いまし)の策で皆を疑心暗鬼に陥らせるのじゃ。居たたまれず、刃(やいば)をとって殺し合い、一人また一人と消えて行くだろう。最期に誰が勝ち残ろうが、自ら刃をとり、高位高官の返り血を浴びた者が御位(みくらい)についた前例はないのじゃ。その時、皇位を継ぐ者としては番外のこの軽皇子様が、棚から落ちる餅を拾うように御位を手にするだろうよ。」中臣鎌足、無言で大きな溜め息をついた後、皇子にご挨拶をして行

中臣鎌足、無言で大きな溜め息をついた後、皇子にご挨拶をして行 方をくらました。

643年4月、飛鳥寺の隣に建築中だった飛鳥板蓋 いたぶき 宮が 完成し、女帝は仮宮からお移りになった。10月、女帝の並々ならぬご 寵愛( ちょうあい)を受け、栄達をほしいままにする嫡男への餞( はなむけ)に、蝦夷は勅許も得ずして大臣( おおおみ) 職を相続させた。このことが増長した入鹿を暴走させることになり、結果蘇我家が僅か 2年後に滅亡するなどとは、我が子の栄達に浮かれ、周りも先も見えなくなった蝦夷には知る由もなかった。

## 天皇国誕生の人柱となられた太子一族

翌11月には父に代わって大臣(おおおみ) を名乗った入鹿に命じられ、巨勢(こせ) か土師(はじ) か兵らが古人大兄皇子のお墨付きを頂いて、太子一族を反逆罪の疑いで捕縛するため、斑鳩(いかるが)宮を急襲した。 山背大兄皇子が、大臣入鹿殿が進める行政改革を似非(えせ) 改革だと愚弄し、それを世間に吹聴しているとの匿名の訴えがあったからである。



それを聞いて山背大兄皇子はこうおっしゃった。

「そのようなことを口にした覚えは誓ってないが、入鹿が進める改革が全くの似非改革だというのはその通りだ。我が国を氏姓制度を廃して律令国家、即ち父上の提唱なされた『天皇国日本』とするならば、先ずは国土と人民を国家に帰属させねばならぬ。即ち豪族たちが私有する領地領民の総てを国家に返上させねばならない。これはもう改革ではなく、血で血を洗う革命なのだ。陛下には悪いが豪族の長などにできることではないのだよ。」

数十人の奴(やっこ)たちが必死に防戦する間、上宮王家の方々は裏の矢田山の山道に身を隠して平群(へぐり)の谷へと落ちのびられた。ご家族がいずれかの宮殿に隠れたと思い込む兵らは、ひとつひとつ建造物を焼き払った。四日も経てば広大な斑鳩(いかるが)宮も跡形も無く焼け野原となった。次に兵らは隣の法隆寺の山門を叩き壊し、境内に侵入するや、無数のお堂の周りに焚き木を積み上げ始めた。太子の英知と労苦の結晶である飛鳥文化の歴史遺産を何の躊躇(ためらい)たなく焼却するかのように。

そこへ山背大兄ご一家が飢えに苦しみながら、ひょっこりと戻って来られた。どうやら誰.一人救いの手をさしのべなかったようだ。皇子様には春米(つきしね)妃と7名のお子様たち、それに加え皇子様ご兄弟やその子供たち、合わせて23名ものご家族が皇子様に従っておられたと言う。平群へぐり)からお戻りになろうとするとき、山背大兄は幼いお子様から、何故戦わないのか? と尋ねられ、次のように答えられた。「吾らの命を長らえるため、召使や領民たちが敵と戦い、命を無くすことがあるならば、あの世で仏様やお父上に合わす顔がないからね。だから戦わぬと決めたのだよ。」

だが夫人や成人したご兄弟には腹中を明かされ、このようにおっしゃった。

「斑鳩宮が炎上した上は、御父上の著作や収集物が残される法隆寺だけは何としても焼失を免れさせたい。だからこれから再び斑鳩に戻ろうと思うのだ、氏姓制度を廃止させ我国を真の律令国家とする使命が吾らにあるならば、ここで命を惜しんで節を曲げるは如何なものか。今まさに『天皇国日本』が誕生する陣痛が始まったのだ。この国を父上が理想とされた独立国家にするためにも、ここは吾らが生きるべきか、死ぬべきか、よく考えねばならぬ。陛下ご自身と陛下がお生みになった二人の皇子様に、あるべき国体について真剣にお考え頂けるなら、吾ら喜んで誕生する天皇国日本の人柱と成ろうではないか。」

ご家族と共に法隆寺に戻られた皇子様は境内を固める寄せ手の兵らに告げられた。

「身支度したら捕らわれようほどに、しばらくの猶予を下され。それまでは国の宝が詰まったこれら御堂には火をつけること無きよう固くお約束願いたい」とおっしゃりながら、ご家族とともに小さなお堂に入られた。



天下に大化改新が号令された難波宮大極殿の跡。中大兄や鎌足らによる命懸けの 偉業の成果を横取りする形で軽皇子様が孝徳天皇として即位なされたのだが、その 後も皇太子との主導権争いが続き、7年後、皇太子が鎌足や間人皇后まで連れて飛 鳥に還ってしまわれると百官の司たち皆飛鳥に逃げ帰ってしまい、一人王宮に残され た天皇はついに悶死されたと伝える。これも因果応報と言うべきか。

兵士らは皇子の言には耳を疑い、顔を見合わせた。自ら投降されても 拷問による取り調べが待っている。幼き子供たちであっても容赦はない。 揃って華奢(きゃしゃ)なお体である。ひとたび拷問を受けるなら、自白 なさる前に皆息絶えるであろう。そんなことも分からないほど皇子様 は世間知らずであったのかと。

だが何時までお待ちしても、ご一家は姿をお見せにならなかった。やがてそのお堂から突然煙が上がったかと思うや、屋根まで真っ赤な炎に包まれた。慌ててお堂に駆け寄った兵士らが燃え盛る炎の影に見たものは、首を絞められ息絶え、床に置かれた幼き子供たちの遺体と、お堂の梁にひもをかけ、首をつっておられたご夫婦に、ご兄弟たち、そして大きくなられたお子様たちの遺体であった。

欽明王朝の正統なる皇位継承者、上宮王家一族自決の報に入鹿 は茫然自失となり、事前に何ひとつ聞かされなかった蝦夷は半狂乱に なって入鹿の愚行をなじったが、時既に遅しと言うべきだった。気がつ くと蘇我は天下を敵に廻していた。中大兄皇子も入鹿や古人大兄に は激しい増悪と敵意を感じられるとともに、太子一族が全員自決してま で何を訴えたかったのか、その意味を心して考えられることになった。

## エピローグ 天皇国日本の船出

上宮王家の自決から2年後の645年6月、蘇我入鹿は飛鳥板蓋宮にて、緻密なクーデター計画を練っていた中大兄皇子、中臣鎌足らによって女帝の面前で暗殺された。大化の改新の発端となる乙巳(いっし)の変である。蝦夷は遂に蘇我の滅亡の日が訪れたことを悟り、息子入鹿の首が晒される飛鳥寺山門を見下ろす甘樫岡の邸宅に火を放って自殺した。古人大兄皇子も吉野に逃げたが、中大兄が差し向けた兵に追いつかれ斬殺された。皇極女帝は一連の事件の責任をとられる形で退位を宣言され、中大兄皇子に禅譲しようとなさったが、固辞されたため、中大兄を先ずは皇太子にされ、弟君の軽皇子様に御位を譲られた。第36代、孝徳天皇である。

孝徳天皇は我が国で始めての年号「大化」を制定され、都を難波に移された。翌646年1月、改新の設 みことのり)が宣布された。その崩御の後、655年には皇極女帝が再び即位なされて都を飛鳥に戻された。第37代、斉明天皇である。乙巳の変から23年後にして中大兄皇子こと天智天皇が即位なされ、壬申の乱を経た時に弟の大海女皇子が即位なされた。

大海女皇子はこれまでの大王(おおきみ)の称号を廃して、初めて自ら天皇と称され、国号を日本国と定められた。そして歴代の天皇方に和風と漢風の諮母 しごう を贈るように官僚や学者たちに命じられた。初代の磐余(いわれ)の大王(おおきみ)には自ら「神武」の諮号を贈られ、一方ご自分の諮号には「天武」をお選びになった。

我が国の総ての領土人民が豪族たちの手から離れ、国家のもとに帰属する「公地公民の制」が緩やかに全国に拡がり、律令制度が完成の域に達したことを示す「大宝律令」が天下に発布されたのは、天武天皇の次に即位された皇后(天智天皇次女)の持統天皇が、孫の文武 もんむ 天皇に譲位され、自らは太上天皇となられた平城京遷都直前の702年のことである。

さて天武天皇に大王の称号や国号の変更を提案なされたのは、兄君の天智天皇、中大兄皇子)であったと言われる。では中大兄皇子様に、太子の言霊による「天皇国日本の理念を一体誰が伝えたのだろうか。後に宮殿内では百済(だら)語を公用語にされる程の異国かぶれと陰口たたかれるバサラ青年だった皇太子が、太子が残された古文書を読み漁ったとは考えにくい。聖徳太子が理想とされた国家像を説き明かすメッセージを中大兄皇子様にお伝えしたのは、入鹿が大臣となった頃、一族の滅亡を予感された山背大兄皇子その人であったと考えるのが自然なのではないだろうか。 (上宮王家の悲劇 完)